

ペスタロッチ研究の現在

— 生誕250年記念国際シンポジウム (1996) を中心に —

宮崎 俊明

(1997年10月15日 受理)

Trends der Pestalozziforschung

— ein Tagungsbericht über internationales Symposium
anlässlich des 250. Geburtstages Pestalozzis, 1996 —

Toshiaki MIYAZAKI

1: チューリッヒ

1996年1月、文部省の派遣で次の学会に参加、発表の機会をもった。「ペスタロッチ記念1996年—生誕250年ペスタロッチ影響史のための国際学術シンポジウム—」(Pestalozzi Gedenkjahr 1996—Internationales wissenschaftliches Symposium zur wirkungsgeschichtlichen Aspekte Pestalozzis anlässlich seines 250. Geburtstages—), ペスタロッチ研究所 (Pestalozzianum) とチューリッヒ大学が共催、ベルン大学が協賛の形で、期間は1997年1月15日から17日まで、会場はチューリッヒ大学とスイス連邦工科大学であった。また、そのあとペスタロッチ研究所でコロッキウム「アジア圏のペスタロッチ」があり、小さな報告を担当した。以下では、研究論文としてはその体裁を欠き、報告としては長く、かつ個人的にすぎるが、あえて綴ってみたい。

文中の人名については敬称等を省略し、かつその原綴りは初出に限って、その重要度に応じて示す。また、参照・引用についての本文での簡略表示(著者、出版年、該当箇所など)は末尾の「文献リスト」との照合で確認できる。筆者の発表内容については別稿でおこないたい。

1月12日は、ペスタロッチの誕生日である。その日のフランクフルト空港とチューリッヒに向う機中で入手したドイツとスイスの新聞は、予想どおりこの記念年を報じ、論評をのせていた。「ツァイト」はフリトナー (A. Flitner) の、「ノイエ・チューリヒャー・ツァイトウング」はシュタドラー (P. Stadler) の論説をのせ、前者にはドイツのリベラルの声を、後者には主催国スイス側の近年の成果を代表させ、あわせて新聞の傾向もみせていた。また、翌日の「フランクフルター・アルゲマイネ」にはエルカース (J. Oelkers) が筆をとっていた。その一方で、チューリッヒの「ターゲス・アンツァイガー」のタブロイド版「週刊チューリッヒ情報」は、赤、黒二色刷りのペスタロッチの顔写真を第一面全体に使うことで、その週の最大のイベントを報じていた (Flitner ; Stadler 1996)。

このチューリッヒには82年以来5回、通算2カ月ほど滞留した経験があり、街の様子はかなりの程度解っている。以前、駅前通りの広場に立つあの有名な銅像にみた落書「かわいそうなペスタロッチ！」も洗い落とされ、街頭の広告塔では展覧会の大ポスターが目をついた。今回のシンポジウムの会場になるチューリッヒ大学と隣接する連邦工科大学の中央棟、そこから200メートルほどの教育学科棟の近辺もこれまでの滞在でもうかなり慣れている。それはボン大学のデルボラーフ (J. Derbolav) によって著作・書簡全集の校閲に半世紀をついやしたデユンク (E. Dejung) とチューリッヒ大学のハーガー (F. -P. Hager) に紹介の手紙をだしてもらったことからはじまった。15年前であり、もう3人とも鬼籍に入っていない。ハーガーの秘書の仲介であるキリスト教組織の経営する簡易ペンションに滞留、チューリッヒ中央図書館に通いつめた。図書館とペンションと大学とは、三角形をなす位置にある。ほとんど構内とっていい一角にはいまは資料館だがトーマス・マンの旧居があり、そこからペスタロッチの生家と転居先あたりは500メートル、かれが通った教会付設の学校も1キロたらずにある。大学のある高台の中腹からは旧市街地やチューリッヒ湖はすべて見おろせる。

翌13日の朝、発表関係者のほとんどが招かれて投宿しているホテル「チューリッヒ山」の部屋にシンポジウムの幹事役トレーラー (D. Tröhler) がみえて挨拶をかわした。この日の夕方からチューリッヒ市と研究所が共催する展覧会「ペスタロッチ—その映像、研究、夢—」のオープニングと立食パーティが、市街地にあつてその由緒をおもわせる古建築 (ストラウホーフ) の会場であり、かれ自身その展示の考証の中心に加わっているといつて招待状をくれた。それに翌日の記念年祝賀行事の座席券や市交通局発行の学会期間中の無料パスを受けた。午後は、ドイツのブランシュヴァイクからきた、こちらの研究上の恩人ホーフ (D. Hoof) にお供してペスタロッチのゆかりを歩いた。旧市街地にあるその旧居を訪ね、そこから狭い路地を50メートルほど入ったところに、青年期のペスタロッチを揺さぶり、ゲートも訪問したラーヴァターの家がある。その前の狭い公園の向かいの家にはレーニンのいわば隠れ家という銘版をみつけたりした。そして中央図書館の近くまできたとき、帰宅途中のワグナーとの奇遇があつた。このひとは、15年まえ、古文書室で利用者の入退室に机上のボタンで開閉し、閲覧に供する文書のチェックをしていた3人のドクターのうちの若手だった。私はその部屋でペスタロッチの読書ノートの手稿 (マニュスクリプト) を批判版全集と比較してその漏れや異同を書きだす仕事を連日していた。マールブルクに戻る前に300枚にのぼるその手稿の、マイクロフィルムでなく電子コピーでの入手を許可してくれた当時の主任ラーヴァターはもう定年退職した、という。こちらがこうしていまチューリッヒに来ている目的はむこうが言い当てた。

2: ペスタロッチ記念年の計画

19世紀後半以来、ペスタロッチにはほぼ50年ごと、ときに25年を刻みにその生年や没年に多彩な

顕彰行事が開催されてきた。それ自体が興味深い研究対象となっているほどである。今回も国民的祝賀をねらって設けられた推進委員会には、次のような13の関係団体の官民の総勢85名の代表が参加している。連邦内務省、連邦議会、労働・経営団体、市民団体、研究奨励財団、福祉協会、学会連合、学校教育団体、教員団体、職業教育団体、ペスタロッチ協賛団体、大学連合、チューリッヒ州学校教育庁。これらによる年間を通じての企画行事には、祝賀祭、研究推進、教員啓発、展覧会、演劇、映画の催し、遺蹟探訪、出版助成、記念賞授与など40件が組まれている (Pestalozzianum 1994)。

このうち研究に直接関係するのは、大学連合だけだが、その11名のなかにはチューリッヒ、ベルン、フリーブルクの学長に混じって教育学研究者にはよく知られているハーガー、エルカース、オーザーといった、上の3大学の教育学科長、それに先のシュタドラーといった知名人が名を連ねている。また、この国際学術シンポジウムのプロジェクトは、組織委員会の事務局が担い、その長には94年に委員会が発足した当時のペスタロッチアヌムの所長ゲーリヒ (H. Gehrig) が、ふたりの副委員長にはその副所長で現所長のデメジュールとチューリッヒ大学教育学科のトレーラーがつき、その下に研究所員が配されていた。その上、この組織委員会にはチューリッヒとベルンの学長と正教授6人に加えベルン大学の新進の教授資格者オスターヴァルダー (F. Osterwalder) が入っている。加えて7人の名誉客員なるものを置き、うち5人がチューリッヒ大学の第2哲学部の現職のファトケとフェントラである。これも保守的な正統的大学チューリッヒらしいいかにもの構想とうけとれた。ちなみに、記念年に計上された予算総額は126万3千スイス・フラン (約1億3千万円)、シンポジウムにはそのうち11万スイス・フランが充てられている (Gehrig 1996)。

3：ふたつの先行シンポジウム (1987, 1994) とベルン派

ここほぼ150年間、ペスタロッチはウィリアム・テルとともにスイスの国民的英雄とされ、継承すべき伝統の遺産とされてきた。しかし、今日では研究の方法論の変化や蓄積、時代の動向からして、その神話化や絶対化は揺らいでいる。事実、1987年2月26～28日にベルン大学の主催で文字通り「ペスタロッチの遺産」と題したシンポジウムがベルン市立教育研究所を会場に開催され、スイスに特有の教員啓発の一面もあって300人ほどが参集していた。これに出席したときには、スイスのふたりの提案者以外は、今回のシンポジウムには姿をみせていないリートケ (M. Liedtke) とランク (A. Rang) のほか、すでに高齢のバルラウフ、ヴァイスコプフの定年退任の後継として着任した新進のエルカースといったドイツ人だった。その上、チューリッヒ大学とチューリッヒ・ペスタロッチ研究所の関係者は壇上の提案者にはいなかった。ハイデガー哲学に依拠するバルラウフはともかく、かれら3人はペスタロッチの生涯、人間学、政治思想などに不統一、矛盾、神秘を読み取り、かれの崇拜者の迷妄に反対しているのが十分うかがえた。サブテーマの「ペスタロッチの崇拜者に反対して」そのものだった。巨像ないし虚像への揺さぶりと実像への接近が、そこにはもう

みえていた (Gruntz-Stoll)。

1994年、半年間のドイツ滞在中、ベルン大学では6月23日と24日の両日、オスターヴァルダーを代表者とする研究グループの5年間のプロジェクト「ペスタロッチ —19世紀の教育影響史—」が終結したのを機にシンポジウム「コンテクストのなかのペスタロッチ」が開催されていた。これは、近代教育学の展開のコンテクストのなかでペスタロッチの人と業績を点検し再構成しようとする試みであった。9人の発表者のうち6人がドイツからの面々であり、他の3人のエルカース、オスターヴァルダー、ゴノンはすべてベルンの研究グループの構成員、最後者ゴノンは前二者が編んで95年に公刊する『ペスタロッチ —周辺と受容—伝説の歴史化の研究—』の一執筆者であっても、そのテーマは若干周辺的なものだった。元来、北ドイツのリューネブルクからきているエルカース、ベルリンからアムステルダムに出て、東西ドイツ統一後ベルリンに戻ったランク、ベルンからカールスルーエに転じるオスターヴァルダーを考えると、この集りもまた「スイス側不在のなかスイスで開かれたドイツ人によるペスタロッチ学会」といえた。特色的なのは、徹底して教育史的なアプローチと一件の発表に2時間近くもあてるコロッキウム形式であり、次のようなテーマで論議されている。

ペスタロッチの「教育学の基礎づけ」を先のランクがその近代性で、ハンノ・シュミット (H. Schmitt) がドイツ啓蒙主義の教育言説に位置づけてとらえた。また、その「教育学の対象と要求」は、エルカースが18世紀の徳論ないし人間論で、マールブルクのニーサー (O. Niesser) がフランスの学問論議でもって把握した。当然、シヨイエル (H. Scheuerl) らの『教育史』の刊行や若手のポスト・モダン傾向以来、近年よく問題にされる「教育学の古典・典型 (クラシック)」論議には、その著者自身や自他ともにみとめる中道派ヘルマン (U. Herrmann) を舞台に呼んでの議論が展開された。受容史の問題としては、「ベルンフェルト・シュプランガー・ペスタロッチ」という興味深いとりあわせや、20世紀初頭の新教育との関係が主題化されている。最後に本題の「コンテクストのなかのペスタロッチ」は、教育史記述の方法論とペスタロッチへの実質的な歴史上の再構成との二面からランゲヴァントとオスターヴァルダーが論じている (Hist. Komm. d. DGfE, Rundbrief 3, 17)。

この会合の直後、元はマールブルクにいて87年にそのゼミに出たりしたシュミットを統一後の任地ポツダム大学に訪ねた。このとき、かれは、そのシンポジウムの模様を話し、スイスでの受容史とチューリッヒの哲学的傾向を批判的に語ってくれた。「ペスタロッチ研究はもう終わったのではない、これからだ」、といったのが印象的だった。最近、かれからペスタロッチと同じ生誕250年のカムペの展覧会のために自らその中心になって作られた250頁の大版のカラー豪華本が送られてきた。それは「18世紀研究の宝庫」といわれるヴォルフエンビュテル図書館が出したカタログだが、ヘルマン

ほか15人の文章でなり、連邦文相がいさつ文を寄せている。研究の水準、その層、資金だけでなく自信のほども示している（宮崎 1996 c 119-121, 156-158；Schmitt）。

ベルンのエルカースとオスターヴァルダーとのペスタロッチ研究の傾向が文献的に確認できるのは、87年のシンポジウム、89年の「教育学雑誌」の別巻特集「フランス革命200年と近代教育学」でのかれらの論稿である（Oelkers 1987；Osterwalder 1989）。また、その後の展開では、個人的には、92年に小著がでた直後、ふたりの連名で2冊の献本を求めてきた、と発行元から聞かされ、やがてその11月、オスターヴァルダーからかれらのプロジェクトを強調した手紙とともに6編の論文がこちらに送られてきたことがあった。このうちエルカースの3編は、90年10月と11月、92年6月にかれらの研究会で発表した未公刊論文、オスターヴァルダーの2編も同じく89年1月のもの、それに国際誌「教育史」（*Paedagogica Historica*）の90年の第1号と「教育論集」（1992）の2種の別刷りだった。それから3年後、ふたりが共同編集し上の未発表論文4編と後者の2編が収録された『ペスタロッチ 一周辺と受容、伝説の歴史化研究—』が登場する。その序文にはこれらが89年から93年までの研究プロジェクトだったことが、ペスタロッチの誕生日を意識して95年1月12日に識されている。このチームはかれらの他に5名でなり、そこには当時ベルンに留学中だった伊藤敏子（宮崎産業経営大学、現三重大学）が、日本の受容の、アメリカ経由という特殊性や、福島政雄に典型的な宗教信仰などのために引き起こした原型からの偏りをいい、そのかぎりでもベルンの傾向を示している（Ito 1996）。

4：小著『ペスタロッチとその読書』

わたしが今回のシンポジウムへの招待状をトレーラーとオスターヴァルダーの連名で受けたのは94年の秋である。それは92年に『ペスタロッチとその時代の性』の著者ホーフの理解でドイツで出版できた『ペスタロッチとその読書』のためかと思われる（Hoof 1987；Miyazaki 1992）。この小著では、ひとつには28巻全集ではきわめて不十分なペスタロッチの読書記録をその手稿で検討し、シェーネバウムが校訂したその批判版の先行作業に助けられて、かれの問題関心や思想形成を時代の知的潮流にのせて類似性や影響関係を打ち出そうとしたものである。もうひとつには当時の定期刊行物5種と単行の版本など約60点から、かれが読んだり抜き書きした箇所を同定し資料集としての提供をねらった。

小著はペスタロッチが「本は読まなかった」「読めなかった」（Pestalozzi 1927ff. 8 - 243；13 - 196）というかれのテキストへの反証というよりも、むしろその後の受容史とそれと密接に関連してきた教育学への異論であり、ペスタロッチの独自性や天才性の相対化、あえていえば非神話化の試みでもあった。この問題提起が、たとえば、当時、国際教育史学会の会長だったデパーペ（M. Depaepé）のような研究者に教育史記述のパラダイム論での言及や、オスターヴァルダーの引用を

誘ったり、クラフト (V. Kraft) の精神分析的研究の方向の正当化を支える刺激をした面があったのは、すでに確認できている (Depapae 1994, 51f ; Osterwalder 1995 d, 184 ; Kraft 1996 a, 20)。しかし、今回の参加は、この3人の言及以前の刊行直後、ふたつの書評のひとつで、チューリッヒの若手トレーラーに「教育学雑誌」で正確を欠く発言をされた行き掛かりも、実は作用したかもしれない。この書評には、小著をその1巻として容れたシリーズの編者であるホーフが当誌の書評責任者であり、かつトレーラーと同僚であるファトケに反論の掲載を求める手紙を出したが、返ってきたのは、「慣行にない」というものだった。しかし、のちに96年にトレーラーが前言を修正するような記述を著者と小著の名を明記しているのも見いだした (Tröhler 1993, ; ders 1996 b, 228)。研究と批判は循環する。

5 : 記念年祝賀行事

「記念年」は、1月12日の誕生日当日、すでにイヴェルドンでの小さな会合で開始されていた。しかし、国民的行事をねらった大々的、公式的な会は14日の日曜日にチューリッヒのシャウシュピールハウス (劇場) で祝賀の火ぶたがきられた。教育者の生・没年の顕彰行事には故人にちなむ演劇がつきものである。たとえば、94年、ロッホのもとで教師だったブルンスの没後200年記念コロッキウムをのさい、かれらが活動したブランデンブルク州の片田舎の教会でふたりに扮した村の学童による劇があったりしたが、ペスタロッチの場合の今回の出し物は、以前によくあったその作品『リーンハルトとゲルトルート』の劇化ではなく、学園の細部に光をあて、ドイツ生まれの音楽教育家、出版人、作曲家だったネーゲリ (H. G. Nageli) を登場させた。かれは1809~10年にイヴェルドンのペスタロッチ学園にいて、共著で『ペスタロッチの原理に基く歌唱教育論』を出したり、ベートーヴェンの知人、さらにはコッタ版の予約講読者でもあった、かれが、学校創立式典にさいし、友情と喜びに寄せて作った音楽劇が祝賀行事の中心になっていた。また、すでに幼児期に父親にともなわれてブルクドルフの学園を訪問、のちにウィーンでベートーヴェンに習い、1816~7年にはイヴェルドンの学園の音楽教師を務めたシュニーダー (F. X. Schnyder v. Wartensee) の歌曲が、チューリッヒの合唱団と小学校6年生によって歌われた。さらに加えて、ペスタロッチとアンナ・シュルテスとの婚約時代の手紙も朗読された。このあと、近年出た2巻本の『ペスタロッチ — 歴史的伝記 —』の著者、チューリッヒ大学の近代史の名誉教授シュタドラーによる短い記念講演があり、かれがスイス側の代表格であることを千人の招待・参加者に印象づけた。最後にひとびとは一台のオルガンの音に耳を傾けた。この楽器はかつてペスタロッチの学園で使われながら、その後売りに出されて人手に渡ったが、州立博物館によるその買い戻しをへて1904年以来ペスタロッチ研究所に納まっているものだった。これでもって記念年の祝賀プログラムのすべては終了した。

その日の午後は、翌日から3日間の学術シンポジウムの講演者と発表者が、この種の学会によくある前日の「顔合わせ」のために旧市街にあってその内装も往古をしのばせるレストラン「ツンプ

トハウス鍛冶屋亭」に招待されていた。これは、再会をよるこんだり名前と顔を重ね合わせるためであり、またスイス国外のひとを中心に遠来の旅の疲れと発表の緊張のときほぐしにかかるためである。ホーフ、マールブルクのスチュービヒ (H. Stübig)、イエーナのフリートリヒ (L. Friedrich) の3人とは2年ぶり、デパーペらがいるベルギーで刊行の国際教育史雑誌「教育史」で小著の書評をしたフランスのセタル (M. Soëtard) とははじめてだった (Soëtard)。

6：シンポジウムの開会

15日午後からのシンポジウムの開会式と全体講演は、前世紀末に創立のチューリッヒ大学の中央棟にあって、正面にナードラーの壁画をもつアウラ (講堂) で行なわれた。まず、連邦政府を代表して、教授資格ももつ若手大臣 (E. Buschor) が、ペスタロッチは民衆教育と国民教育に貢献したが、いまやそれを踏まえたエリート育成と情報教育が課題だと語り、新保守主義者の面目をみせて降壇した。次のシュミット (H. Schmid) 学長は、ペスタロッチの通ったコレギウム・カロリウム校がかれに棄てられたことをそこがこの大学の前身であるだけに悔いる、とって参会者を笑わせた。そのあと、ここ数日来賑っているジャーナリズムを意識して、プロテスタント神学者らしく、すでに50年代にあったイエスの神話にたいする様式史的、弁証法的な解体の非神話化にふれた。そして事実のみを残す歴史に対比して、「価値と真理」へ媒介する神話化作用の意味を説き、ポストモダンの時代にみられる「事実と伝説との価値引下げ」の限界を訴えた。組織委員会からは、ハーガーが主催大学の哲学的、精神史的教育学の学風の担い手、ペスタロッチを啓蒙主義と新プラトニズムのキリスト教の枠組みに入れる後日の講演者らしく、現代における啓蒙の神話の後退とペスタロッチの非神話化の進行とが開かれた地平で論議されること、これが今回のシンポジウムの目的だと言明した。

7：シンポジウムの構成

部会は、分科会と全体会からなっていた。分科会としては、ペスタロッチの、1)「社会的、政治的宗教的思想とその変容」2)「人間学、哲学、精神史」3)「メトデー (教育方法) と学校」の3つが設定された。全体会は、中心講演と枠組み設定講演との2種類から構成されていたが、前者に7件、後者に3件のあわせて10件が、それぞれ1時間を与えられ、ほぼ3日の期間に配分されて進められた。中心講演は、分科会のテーマにおおむね対応させる形で1)がヘルマン (U. Herrmann) とオスターヴァルダー、2)がデルスペルガー (R. Dellsperger)、ハーガー、トレーラー、3)がテノルト (H. -E. Tenorth) とエルカースに担われた。枠組み設定講演の場合は、教育学分野の外で18世紀研究の知名人が招待され、スイス史のインホーフ (U. Im Hof)、比較人間学のモラビア (S. Moravia)、教会史のブレヒト (M. Brecht) の、スイス、イタリア、ドイツからの3人に担当された。分科会の18件は、3日間で展開され発表では1題40分だったが、その討論は、初日は各15分、中日は55分、最終日は10分のように差があり、約150名の参会者は、分科会と

全体会に応じ会場を移動した。とくに分科会の発表主題には、必ずしもおさまりのよさはなかったが、これは当初計画されていた「神学と宗教」の分科会が95年上半期の段階で他に分散させざるをえなかったことに一因がある (Tröhler, 1995)。朝9時すぎにはじまり、初日、中日の終了時刻は9時前後に及んだ。朝は早く、大学の職員食堂やメンザでの休憩を楽しむために昼は長く、夜が遅いという欧米によくある時間習慣がここにもあった。

発表に配布資料はなかった。ただ、前日までにフロッピー原稿の提出が義務づけられ、それがハーガーとトレーラーの編集になる「新ペスタロッチ研究」第4巻、1996年号全500頁の発表集録として刊行された (Hager, F. P. / D. Tröhler 1996 a)。そのなかで、分科会発表の報告は平均8頁に注釈や図表が加わる程度で、発表での持ち時間に対応するが、全体会のものにはヘルマンやハーガーの場合のように3~40頁に及ぶ特別扱いもある。

以下、本稿では、筆者が参加できたのは全体会の発表と、ほぼ3分の1にならざるをえなかった分科会の発表だが、上の集録と筆記メモ、さらにシンポジウム前後に出た関係の論著にもよりながら全体的な紹介をし論評をしていきたい。そのさいベルンから出たペスタロッチ像へのゆさぶり、精神分析によるペスタロッチの解明、ペスタロッチ派の受容についてスイスとドイツの差異、これらをめぐって問題を整理したい。

8：近代意識の葛藤 (U. ヘルマン)

先にあげた3人の開会挨拶の直後、ヘルマンが最初の全体講演をした。かれは、最近、ウルムに転じたが、ノール、ヴェーニガー、モレンハウアー、さらにはクラフキといった、いわばゲッティンゲン派の精神科学的教育学とは別の、シュプランガーやボルノウのチュービンゲン派のその正嫡である。18世紀研究のプロジェクトのオルガナイダー、近時ではベルンフェルト全集の編者として、その守備範囲の広さでも知られる。講演は、「政治-社会的近代化過程のコンテクストにあるペスタロッチの思考」をとらえるために「伝統」と「近代」を社会構造からコミュニケーション様式まで16の位相で特色づけたレプシウスの社会学的な図式を用い、アンシャン・レジームからフランス革命への移行段階にあったペスタロッチの初期・中期と民衆教育、時代診断にすすむ後期との差でとらえようとした。この場合、ペスタロッチが直面しているのは、社会文化、支配の正統化、政治参加、葛藤解決方式などの差でみられる「伝統」と「近代」の対立であり、そこでのいわば「教育から学習へ」の近代化過程がみせる危機意識であった。そこには「哲学の世紀」や「教育の世紀」の楽天的理想主義はなく、近年ベルリンのヴルフらがその歴史的人間学のコンテクストで発掘している「懐疑的人間学」との重なりがある。ペスタロッチが神話化され「カルト」に利用されたのは、教育実践の使命感に不可避の転化であって、かれの思考に内在したものではなかった。このように説くヘルマンにひとはシュプランガーが1927年の没後100年記念祭で同じチューリッヒで

した講演を想起し、ベルンのエルカースとオスターヴァルダーへの抵抗を読みとっただろう。そのことは冒頭と結句のかれの文言だけでなく、ペスタロッチ研究所の「新ペスタロッチ誌」(Neue Pestalozzi Blätter)でのインタビュー記録や98年度の非常勤講師の事実でもわかる(Herrmann 1996 42ff, 56; ders, 1987)。

9：ペスタロッチ像の非神話化 —歴史物語の脱構築 (F. オスターヴァルダー)—

初日のもうひとつ全体講演はオスターヴァルダーの「教育学と学校の世俗化論議のなかのペスタロッチ派の立場」だった。発表集録では「論議」が「形成」の意に変更されているが、かれの問題提起は、19世紀前半における教育と学校の世俗化と公共性にむけた論議において、ペスタロッチ主義者はむしろ反世俗的神学化、あるいは神学の世俗化された教育論に取り込まれていったこと、このため教育の世俗化では、たとえばニーデラーなどの場合のように、学校の公共的制度化やそこの市民形成などでかなり立ち遅れていたとみた点にある。教育の反教権的世俗化にたつりベラリズムからすれば、ペスタロッチがその教育理想を投入した『メトデー』(1800)は「神秘的教育学」や「愛の神学」であり、その学園は「教育セクト」と映り、かれ自身は神学権力の「サンチョパンサ」とすらされて論難や揶揄の対象になっていた。また、オスターヴァルダーは、1848年の生誕100年祭を機にスイスではなくむしろドイツで、たとえばその初期には限界をみていたディースターヴェクが権力的学校政策に対抗するためにペスタロッチ賛歌を歌いはじめた、とみる。このようなドイツでの受容のあと、本国スイスでのペスタロッチは1896年の生誕150年のころから国民学校の父性的権威主義のもとで「父なるペスタロッチ」に祭り上げられた(Osterwalder 1996 a 359ff)。

ペスタロッチの『メトデー』の後段に位置する「頭・心(臓)・手」の陶冶論のコンセプトに注目するなら、この3要素には、教会勢力と宗教思想の影響下でアクセントが「心」に移動させられ均衡は破綻している。エルカースの言い方を借るなら、「心と手あって、頭なし」でさえあった。そこには教会のドグマと教育世界に通有のユートピア待望との融合があり、ペスタロッチ像が神話化され、伝説化される道が拓かれていった。それは「論究」の結果でない、もう「スローガン」と化していた(Osterwalder 1995 d; Oelkers 1996)。

シンポジウムでのオスターヴァルダーは、主題を神学・教会と教育の世俗化の問題に限定しているが、これは当初は3つの分科会に加わる4つ目として計画され重きをなすはずだったが成立しなかった。しかし、このテーマは同時的に刊行されたその大著(Osterwalder 1996 b)で追跡されている。かれが19世紀を通じてまずペスタロッチの生前、次に没後から1860年まで、さらに生誕150年の1896年まで、と3期に分けて捉らえたペスタロッチ派は、まず教会勢力と内部の神学的、宗教的勢力にとりこまれ、次に反教権的リベラリズムと対立、最後にペスタロッチ像は原型から逸脱して偶像化され神話化の道を拓くことになる。

10：伝記記述の制度化と教育学の「再神学化」

シンポジウムでは論じなかったものの、オスターヴァルダーがその主著で執拗に追究するテーマにペスタロッチをめぐる伝記記述の問題点がある。たとえば、伝記作者モルフは、ペスタロッチを賞賛されるべき国民教育の実践者に仕上げ、それを初期をあとまわしにして急楯えとも映る変則的な編年体で構成した。そしてかれは、教員養成所の長がそのリベラリズムゆえに追放されたあとのポストについた。フンツィカーも、たしかに、「ペスタロッチ文庫」の編纂委員会を組織して資料の整理と刊行をし、啓蒙的テキストを提供したが、そこでは、ペスタロッチをキリスト教化し、教育をナショナリズムの枠内にいれて偶像化していった。そして新生チューリッヒ大学の最初の教育学担当教授に就任した (ibid. 405)。

ここほぼ10年間のベルン大学のペスタロッチ研究は、理論家エルカースを先頭にしながらも、かれ自らも記すようにその実質はオスターヴァルダーが担ってきた (Oelkers 1995, 25)。そして宗教的、政治的に偽造されたペスタロッチ像の伝記記述を問題視する。偶像化されて祝祭の主人公や国家的教育のとりでとされたペスタロッチの伝記記述はいわば制度化されていたからである。このため19世紀後半のペスタロッチ教育学を「再神学化」とまでいう。1896年の150年祭をプロモートしたのも、フンツィカーだが、この伝記作者と教育学とが、出版物、高等教育機関、記念行事などとおして研究の制度化に機能した (Osterwalder 1996 c 19f)。ペスタロッチが目前に迫った「新教育」の思想的契機としてルソーのようなインパクトはもちえなかった理由もそこにある。こうしたペスタロッチ受容の問題点や限界に注意をうながすオスターヴァルダーには、同時代にバーゼルのニーチェが神学を攻撃していた事実が念頭をよぎったかもしれない。事実、その主著『ペスタロッチ —ある教育カルト—』の序文にはニーチェとハイデガーの名が登場する (Osterwalder 1996 b 11)。しかもかれは、このようなペスタロッチ受容の盲点や偶像化は、その後も今世紀の60年代までの精神科学的教育学の主流にも引き継がれているとみる。この懐疑的、否定的な評価からすれば、ペスタロッチとその流派に立脚する教育運動もひとつの「近代神話」だったといたげである (ibid. 382)。

かかるオスターヴァルダーの偶像破壊的ともいえる論調は、案の定、会場ではフィンランドのトイヴィオやシュタドラーといった高齢の知名の士や、フランスのセタールからの反対表明を誘った。47歳のかれ本人については、全体講演のヘルマンやイタリアから唯一招かれたもの静かなモラヴィアがその発表集録に謝意や謙虚さを記すほどでなくとも、乗り物で居合わせたりホテルのラウンジでかれが研究上私淑しているというインホーフといるところで同席したときの印象は、柔和な「スイス」人、英国型の紳士だった。一時期、フリージャーナリストの経歴もあり、学位は「シュツルム・ウント・ドラング」、文字どおり疾風怒涛期の文学論文であって、教育学領域にその居場所を見出した人ではない。それもあってか、発言はともかく思考と文章は激しい。事実の蓄積でペスタ

ロッジ受容・影響の「歴史化」と「コンテクスト」をあぶり出し、その冗舌ともいえる筆致や派手な引用で進んでいく。このような先行パラダイムへの批判の姿勢は、エルカースとも重なる。それは、共に編んだ「周辺と受容」の序文にもみてとれる。かれらにいわせれば、「古典」とは「多面的読解」を排した「よくある一面化」であり、「硬直したカノン（規準）」でさえである。ペスタロッチの名を冠した学校、道路、協会、記念日、はては思い出の品々（スーベニール）、ペスタロッチにちなむ記念論集、回想記、伝記、教育勸告、これらもまさに異口同音のその「古典」の「伝説化」を助長してきた（1995 a 7 f）。

ペスタロッチおよびペスタロッチ主義者の影響・受容問題というシンポジウムの中心テーマは、歴史的検討をきびしく要求された。そして、ハーガーのように、従来の哲学史的、精神史的な背景や連関をさぐるよりも、むしろオスターヴァルダーのように、神学的、宗教的位相などにも着眼してペスタロッチ主義者の変容の軌跡をたどった評価の方がはるかに参加者の注目を集めた。オスターヴァルダーが歴史のコンテクストにみたのは、ペスタロッチ主義という「教育カルト」と、ペスタロッチ伝の記述における問題的な偶像化であり、それはシンポジウムの後も続く（Osterwalder 1996 c, d, e, f）。オスターヴァルダーからすれば、「ペスタロッチ研究」の主たる問題点は、1）モルフ、フンツィカーによる伝記記述 2）広義の超越主義（トランスツェンデンタリズム）による現実からの遊離 3）このふたつをふくむ受容と影響の「先史」にある。これらがペスタロッチの教育理念やその活動と作品の神話・偶像化の影響史に浸透し、教育学アカデミズムを生き延びにさせている。したがって、ペスタロッチの「伝統」の「受容と影響」を歴史のコンテクストにいれた徹底した研究と解明が必要である。さらにいえば、それには事実の再構成（レコンスツルクチオン）よりも、神話化と偶像化の廃棄、語義どおりの脱構築（デコンスツルクチオン）が求められている（Osterwalder 1995 b 12, 18ff; ders 1995 c, 52）。

11：解体される教育者 —精神分析の対象と化したペスタロッチ（V. クラフト）—

こうしたなかオスターヴァルダーのような歴史研究ではなかったが、伝記研究の点では共通面をもち、そのかれの場合と似た経過を示した、もうひとりの注目すべき発表者がいた。それがフロイト派の精神分析の視角で伝記的解明を試みたクラフト（V. Kraft）である。かれらふたり、前者が1951年の生まれ、後者が1947年、その教授資格論文は、一方は94年にベルン大学、他方は95年に北ドイツのキール大学、その主著の公刊はいずれも1996年のごとく、類似点ないし共通点がある。また、学術誌の編集には一定程度の傾向や組織特性があるとはいえ、そこでのふたりの論稿が、前者の場合はドイツ教育学会に近い「教育学雑誌」に（Osterwalder 1996 e）、後者はドイツ教育学会教育史委員会の機関誌「歴史教育学年報」に発表された（Kraft 1996 c）。この取り上げられ方には、かれらの方法論からすれば、教育学に歴史を、歴史に精神分析をといた導入の一種のねじれがおこっており、かえってそれが評価の大きさと注目の多さを語っている。また、このふたりは、ペス

タロッチ研究所が刊行する研究情報ジャーナルともいえる「新ペスタロッチ誌」には共通して登場する。逆に、ハーガーも編者で哲学的、保守的な「教育学展望」誌のごとき場合は、精神分析的・心理的に相対化されたペスタロッチ像をもちこむクラフトを登場させないのもうなづける。なお、シンポジウムの発表集録集となった「新ペスタロッチ研究」第4巻についての、当時はベルンにありいまはチュービンゲンにいるグルンダー (H. -U. Grunder) による書評でも、このふたりの論点は、ヘルマンの近代化論、カイル (W. Keil) が『ゲルトルートはどのようにその子らを教えるか』をもじって、「ヨハン・ハインリッヒはどのようにその子らを教えるか」と題した息子ヤーコプへの教育論の2編とともに多くの言及がされている (Grunder, 1997)。

12：教育者ペスタロッチの乳幼児期

シンポジウム初日、第2分科会でのクラフトの発表「伝記と教育理論—ペスタロッチの《心・頭・手》への精神分析的洞察—」は、かれが研究の視座とする、1) 父母、兄弟姉妹との家族関係 2) 息子ヤーコプの教育 3) その教育思考への反映、この3つのうち、1) と3) に限定された (Kraft 1996 a 277f)。ペスタロッチは6歳で父親の死に直面、その1か月後に末の妹が誕生、7歳半の時点では兄2人、弟1人、妹3人の6人のうち4人を失っていた。クラフトは、これらを父母の結婚から10年間のかれらの生没年と母親の懐胎期間まで記した年譜図表をオーバー・ヘッド・プロジェクターを用いて示した。このような発表手法は、ペスタロッチのCD-ROMテキストの編者のひとり、シュプリンガーが示した概念図と、筆者がペスタロッチの読書内容の数量と時期や時代の出版物内容の動向をグラフで示しただけだったが、クラフトの場合は、発表の主題もふくめていかにも心理学研究者らしいものだった。もちろん、なよりの新鮮さは、ペスタロッチへの精神分析だが、とりわけ従来スイスに特徴的なユンク派のそれではなくフロイトを中心にコフトやエリクソンに依拠し、そのタームを多用したところにあった。

クラフトが上の1) でペスタロッチの乳幼児期を精神分析的に解説してみせたものに、両親、ことに「母親のイマーゴ (原像) の不足」、その早い死ゆえに現実性のない「理想化された父親像の形成」、およびそれとの「同一化」がある。さらに1歳未満と2歳のときにふたりの妹をそれぞれ6か月と3歳の死で失う「対象喪失」、その結果としての女中バーベリへの「愛着」と「エディプス的な同一化」や「欠損ゆえのナルチシズム」がある。そこに中心的にみられるのは、かれの「ナルチシズムの補償表現」である (Kraft 1996 a)。

13：作品と学園活動に潜むモラトリアムとナルチシズム

ペスタロッチの青年・成人期のモラトリアムには、一方でアンナへの親密感や、職業的アイデンティティの不充足、親としての子の「産出」(ジェネラティヴィティ)、他方でその想像力を羽ばたかせ執筆活動の花が開く「文学的モラトリアム」がある。それはたとえば、『夕暮』での君主にみ

る父性への依存、『リーन्हルトとゲルトルート』でのよき母親像や父親教像として展開された (Kraft 1996 a 278; ders 1996 c 30 f)。また、その後の『シュタンツ』での体験ではかれは障害をもった実子ヤーコブの教育の「失敗の修復」をしており、そこには「別の息子さがしをする」かれがいる (Kraft 1996 c 38)。

高齢期におけるペスタロッチはその学校に、制度的なるもの一般がもつ防衛メカニズムを見いだし、『メトーテ』では「家庭」的理想をもち、家庭と同一視された学園 (ハウス) の実現の道をめざしている。このときに起こる、制度一般がもつ現実原理とナルチスの「夢」との分裂も、かれに内在する葛藤にほかならない (Kraft 1996 a 278-287; ders 1996 c 35)。かれが安らえる基礎陶冶の教育世界は、自然的母子関係が結晶化する世界だが、しかしそれも学園の現実の外部、つまり、イギリス人グリーンブスへの書簡に託されるしかなかった。ただ、このようにかれに一貫したナルチシズムがむしろそのトラウマゆえに昇華された教育世界をみせることも留意すべきである。ここにかれの理論と実践とが複合した「テキスト」の精神分析的読解とその意味の掘りおこしの必要が提起された (Kraft 1996 a 292)。

クラフトのこの発表に対しては、30人ほどいた会場の反応はさめており、むしろ平静を装っていたといえよう。実は、かれの前に筆者には、「ペスタロッチの『読書ノート』手稿にみるその民俗学的関心」(Miyazaki 1996 a) の発表があり、かれに限って手控えのメモを欠くが、たしかに他でみた反応とは違っていた。討論での発言は分科会の3倍規模の全体会や、主題、司会者、発表者、参会者、会場の特徴や関係で異なっていた。たとえば、ヘルマンやテノルトごとき知名人にはないに等しく、ハーガーからもその内容が関係して聞けなかったが、神学・宗教主題のプレヒトには8人、エルカースには7人と多く、分科会でもオスターヴァルダーが司会し、スチュービツヒ、ヒンツなどがしたプロイセンでの受容問題の発表では10人ほどの参会者から16回の発言が出ていた。クラフトの場合への少なさがむしろその漸新さへの反応であるのは、その後のかれの積極的な取り上げ方ないし取り上げられ方でもわかる。

14：教育学の精神分析的研究とその潜在的テキスト

クラフトがめざすのは、さしあたって教育学者にかんする精神分析的な伝記であり、次にそれと関連する教育理論の位置づけ、さらにはその教育学史の試みである。たとえば、教育学者にはナルチシズムの痕跡や葛藤が早期に母親を失ったルソウ、フレーベル、W.フリトナー、ヘンテツヒの自伝的著述や実践に見いだせる。また、ヘルバルトの家庭教師時代や、リーツ、ヴィネケン、ニールなどの新教育の実践家は家族関係に葛藤をかかえていた (Kraft 1996 b 15 ff, 367)。そうしたなかで父親を早期に失ったペスタロッチのケースはめずらしい。クラフトの方法論には精神科学的教育学のもとでの教育者列伝は深層化され、ハーバーマスがしたようなディルタイとフロイトの架

橋や、コフートの理論装置によって「教育的自己」の解明に備えられる (ibid. 374)。かれは、ルーマンのように教育学の「欠陥」を社会システムの構造化の問題とみるのではなく、むしろいわば「教育者システムの反省問題」のなさとみる立場をとる。この問題点はつとにアドルノも「教育者のタブー」として捉え、近年ルーチュキもそのベストセラーで「闇の教育学」として示唆している。クラフトは精神科学的教育学のなかで精神分析に許容的なロッホやプランゲの線上から逸脱することなく、「教育学の精神分析的科学研究」のパラダイムの方向で教育学的思考のジレンマ、教育意識のもつれなどを読み解こうとする (ibid. 11ff; 宮崎 1986)。

このクラフトの立場からすれば、「教育の理論という顕在的テキストは、(自)伝記という潜在的テキストへの回答である」(Kraft 1996 c 39)。したがって、かれは1920年代のシェーネバウム、ヴェルンレ、シュタインのごとき精神史的なペスタロッチ伝、60年代のランクの政治的なそれなどは決定的に異なる。また、近年、シュタドラーの千二百頁におよぶ浩瀚な「歴史的伝記」も多量の資料を使用して上の「顕在的テキスト」を客観化したか、「潜在的テキスト」に迫ったのではなかった。子どもと、かつて子どもだった大人には、「歴史以前の前史」(フロイト)の闇が洞察される必要がある (Kraft 1996 c 28)。学習や教育の挫折と、逆にトラウマを秘めた学習や教育の成功、このパラドックスは精神分析の媒介で回答がえられるだろう。ここに「精神分析による教育の歴史」が必要とされ、それが提案される理由がある (Kraft 1996 c 44)。

15：もうひとつの分析と反論 (H.Ch. コラーと G. ビットナー)

周知のように、精神分析でペスタロッチを裁く先鞭は、たしかに1920年代半ばにベルンフェルトにつけられた。かれは1970年代には批判的教育科学によって重視され、その『シジフォス、別名、教育の限界』(1978)が刊行された。92年にはヘルマンの編集でその全集の刊行がはじまり、96年までに2巻が上梓されている。また、戦後の精神分析的把握には、1950～60年代にスイス圏でユンク派の立場からの、70年代には批判的教育学に近い位置でフロイトとマルクスを結合しようとする立場からの学位論文程度のものはあった (G. Werner; I. V. Rapard; H. Worm)。今回のシンポジウムでも元来は牧師、いまは少年院で活動するヴルシュレガー (O. Wullschleger) が青少年の「反社会性の痕跡をさぐって」を発表したが、かれ自身はその小冊子『すべてを他者のために、すべてを自己のために』(1987)で19世紀末の改葬時のペスタロッチの墓碑銘をいわばもちってそのイデオロギーとナルチシズムを捉えてみせていた。92年の小著では以上の先行研究をふまえ、6つの研究パラダイムの変動のうち精神分析的研究を最新ないし来るべきパラダイムとしたことがあったが、クラフトはそれにもふれて自らの方向を傍証している (Kraft 1996 b 20; Miyazaki 1992; 宮崎 1984)。

同じ精神分析的な接近でも、クラフトが「衝動」(トリープ)の充足と不全の緊張関係を前面に

押し出したフロイトの方法を中心に捉えて進んだのに比し、コラー (H. Ch. Koller) の場合は違っていた。かれは、自己の無意識的記憶痕跡と他者に向けられる言語表現とが、衝動には還元しえないとするラカンの「欲動」(ヴンシュ/デジール) 論を用い、ペスタロッチとジャン・パウルにみられる子どもへの教育愛と言語との構造関係をとらえようとした (Koller 1980 55, 85)。さらに注目すべき特徴は、ペスタロッチが書き綴る「ことばの海」への着眼と、そのマニュスクリプト (手稿) をも欲動の表現として位置づけたことだった (ibid. 184ff)。

56年生まれのコラーが理論的、歴史的研究の先鋭性において人目をひく新しい星のひとりであることは、かれの研究行程も語っている。マールブルクでの卒論では18世紀の教育施設をフーコーで切り、ハンブルクでの学位論文ではラカンでペスタロッチを分析、これによってハンブルク大学が優秀学位論文に隔年で与える W. フリトナー賞の受賞した。実際、かれの新鮮さは、94年秋、ドイツ教育学会系の教育哲学会秋期大会でもうかがうことができた。このときは、W. フンボルトをリオタールのまえに連れ出して検討した (宮崎 1996 c 146ff)。かれには、実体化された教育概念の動揺と、近代の終焉という出口なしの歴史状況の考究にその一貫性がある。この業績でかれは1996年度ドイツ教育学会若手研究者奨励第2等賞をうけている。

フロイトによるクラフトとラカンによるコラーのふたりの精神分析的なペスタロッチ把握のあいだに割って入ってきたのが、同じく精神分析的自伝研究の関心者ビットナー (G. Bittner) である。かれは、解釈学の立場からペスタロッチを「自伝的思考の人」と捉え、その青年期の「夢想」と5歳の『探究』期までの「メランコリー期」をへて、つまり「自ら落ちこんだこの地の泥」(Pestalozzi 1946 ff, 3-300) を抜け出て、教育実践で自己の存在証明 (アイデンティティ) を入手した、と位置づける。このため、クラフトの場合を「症例的把握」、コラーを「非歴史的手法」とみなし、いずれも「歴史」のコンテクストから逸脱したものとして遠ざけた。ビットナーは、フロイト的一般化を拒み、とくにクラフトにある「ネガティヴィズムへの傾斜」を非難する (Bittner 1997, 357ff)。ただ、その主張は、近年増えつつある教育学者が自ら綴る自伝的記述にその時代や地域の特性を重視する方向や、社会学的な実証的比較研究論に近い発言であり、そこでの理論的な新鮮味はむしろ少ない。それは精神科学の歴史相対主義と教育行為の倫理的責任の賛美という従来の視点を多く出していない。むしろその方向へ立ち戻っているというのが正確であろう。

16：受容・影響問題 —ドイツ側からの応答 (H.E. テノルト) —

エルカースの場合にしてもそうだが、あえていうなら、ベルン派の「歴史化」(Historisierung) の射程は、先に触れた87年と94年のベルンでのシンポジウムでも端的にうかがえた。そこには、チュリッヒないし従来の哲学的立場を挑発し、その強力で長い影響力に抗して、ペスタロッチの「非神話化」に着手するチャンスが到来したとみた面がなかったとはいえない。とくにベルン派は自ら今回のシンポジウムとその前後において台風の目となった。分科会のプログラム構成でも「神学・宗

教と学校」として独立させようとした分科会の当初の案の不成立という変更もおこったが、記念年としての1年間、公式の祝賀セレモニーやその後の諸々行事が開催される時、オスターヴァルダーとエルカースとの「共同戦線」がシンポジウムにもたらした論議の渦は、主要テーマ「受容と影響」研究の窓口に風とおしをよくした意味はあった。ペスタロッツ受容の発表件数は6件に及び、スイスと日本の各1件以外は19世紀ドイツのプロイセン期に集中していた。チューリッヒのシュタドラーのもとで研究した若手 (D. Winter) が、1896, 1927, 1977, 1946年の生没記念祭での共通点を「連邦議会的なペスタロッツ」としたタイトルで短い報告をしたが、これはベルンとチューリッヒの両州 (カントン) の大学での研究の問題意識が交差した現象ともいえた。

ドイツの研究者のなかにはホーフやドレッガーのように、ペスタロッツを社会教育や教育実践の場面で評価した場合はその「ユートピア」がむしろ時代に先行するリアリティをもっていたとみている (Hoof 1996; Dräger)。また、スチュービヒがクラウゼヴィツ、グナイゼナウなどの軍事的、行政的指導者が直面した市民層との拮抗を主題化した場合には、ベルンの側がスイスで掘り起こし指弾するところと異なっていた (Stübig)。なかでも、2日目にアウラでの全体講演を担ったテノルトは、政治化と非政治化 (R. Hinz; M. Kuhn) といった二極化への偏向や加工には評価の判断を保留し、むしろ教師の職業アイデンティティとそこでの理論的、倫理的課題からペスタロッツ運動の積極面に近づこうとしていた。かれはペスタロッツをベルンフェルトがした「聖ペスタロッツ」というシンボルへの書き替えをそのまま受けとめず、また、ベルン派がいう「偶像化」や「ドイツ的シンドローム (病的症候群)」とする断定にも慎重になっている。近年、その『歴史的教育学』の構想がみせるように19世紀以来の学校教育改革の展開のダイナミズム、その成功と挫折、社会システムと実践行動の関連場面などを探ろうとする (Tenorth 1990 151ff)。このため講演では、一方で教育科学と個別科学、他方で教職が専門的自立に向う過程を歴史的にとらえるアスペクトを設定した (Tenorth 1994 25ff)。ペスタロッツ信奉者の演じた役割は、汎愛派や講壇教育学者のニーマイヤーなどとは違って、政治的圧力や宗教的勢力が強いた「聖職者」の悲惨と矜持という二重の屈折したラベリングに抵抗する戦略行動にあり、そのためにペスタロッツを「利用」したにすぎない。ケーニッヒスバルクやベルリンでのペスタロッツ記念祭とディースタヴェークが関与した影響力は、世俗化された職業倫理を歌いあげる祭典とはなったが、決して宗教のもとでの「教育カルト」でなかった、とみる (Tenorth 1996 426ff)。

17: ベルン・グループの位置と「研究者地図」

シンポジウムでのオスターヴァルダーとテノルトとがみせた相異なる主張に、その前後のかれらの言説をもちこむとき、チューリッヒとベルンとの対比以上にペスタロッツ研究と教育史をめぐる問題圏がみえてくる。テノルトは、オスターヴァルダーの主著を「傑出した研究」としながら、その注釈部分では「あまりにみごとで明解な引用に導いてくれるが、問題なしとしない」と記す

(Tenorth 1996, 423, 439)。しかし、かれは、この批評のあと、それはシンポジウムの数か月後だったが、自身が編集主任のひとりであり、エルカースもそこにある「教育学雑誌」の冒頭のエッセー欄をオスターヴァルダーに提供した。そこでも、オスターヴァルダーはペスタロッチ自身の思想の論調や自伝記述にある断層と矛盾、ディースタヴェークやシュプランガーにみられる把握の変動や誇張を指摘する。かれは、教育学がその古典性ないし範型をもとめてペスタロッチに依拠しようとするとき、その基礎づけに合理性や論議はない、むしろ教育的パフォーマンス、教育家のカルトがあるだけだとくりかえす。したがって、ポストモダンが歓迎されるなかでモダンのためにペスタロッチの救済はあるのか、それとも、あるのは「フィクション」だけか、と問う。ただ、かれは、この問いが「知の考古学」や「レトリック的知」の装いで応えられるとはしない。少なくとも後者を使うデマゴグと手を結ぼうとはせず、むしろ教育学はその回答をもたぬまま、とする (Osterwalder 1996 e)。このことは90年代に入ってドイツ教育学のパラダイムがその反省期に入っていることとも関連する。別稿に期したい。

たしかに、ペスタロッチに関する出版物には、単に研究書にかぎらず、その目的、読者層、なによりその手法によって異なる多様さがある。教科書の類はともかく、文学的ノンフィクション、たとえば、ザロモン、ハルトマン、シッフフェルリなども刺激的だろう。問題なのは、研究と啓蒙とを混合し、その境界が崩れたもの、書き手の思い入れや自省の過剰なものであって、これが「受容と影響」になる限界は注意されるべきであろう。その点で教員養成や家庭教育の分野の持ち込まれるペスタロッチにはなによりも偶像化や神話・伝説化の危険がある。

今回の250年記念国際シンポジウムでの質疑や発言では、一方で、主催したチューリッヒ大学とペスタロッチ研究所のメンバー、さらにその後者に関与するフリートリヒのような旧東独大学圏の一部の研究者と、他方での旧西独と近年ベルン大学でのドイツ出身者エルカーとスイス出身でドイツへの転出者となるオスターヴァルダーが占める研究者らとの間に対立の様相がうかがえた。これは先行した上述の87年と94年のシンポジウムからしても当然であり、再浮上ともいえた。また、今回のドイツとスイスの差は、発表件数をみても、中心講演7件のうち2と5、枠組み設定講演3件では1と1、1件はイタリア、分科会発表では総計18件のうち、12と4のように伺える。すべては組織委員会による招待発表だった点でそのバイアスは否めぬが、研究水準はその論著でもわかるようにドイツ側ないしドイツ出身者の優位を否定できなかった。これら研究の質量両面が、パラダイムに影響することはいうまでもない。一国中心の閉塞性は、たとえ教育学の実践性や政策反映効果を論拠に抵抗しようとしても、それがイデオロギーに転化したり歴史研究の審判の前に連れ出されざるをえない。また、今回、ランクとリートケのように、最初から招かれざる、あるいは招待されても拒んだドイツの著名な研究者もいた。たとえば、そのことを94年にリートケから直接聞いたし、事実、かれはチューリッヒのハーガーとトレーラーとが編者となり93年から刊行しはじめた「新

ペスタロッチ研究」を「教育学雑誌」での書評で芳しくっていない (Liedtke 1994 483)。

本拠地を自認するチューリッヒとそれに対抗するベルンの位置や、両者のパラダイムの差は、戦後ドイツ語圏の教育学一般の学術誌で刊行経過年数がそれぞれ50余年と40余年になる「教育学展望」と「教育学雑誌」でその編集者集団に先のハーガーとエルカースがいることでも裏書きされよう。ちなみに日本の場合のペスタロッチ受容と評価傾向は、名実ともに「教育哲学」に執着し多くの蓄積をもち、かつ強力な大学単位の系譜性を維持する傾向からして、依然としてチューリッヒ側に近いといえよう。それはたとえば、広島大学や、そこが中心になって活動している日本ペスタロッチ・フレーベル学会およびその編集になる学会誌「人間教育の探究」、この学会が記念年にふさわしくスイスとドイツにすら前例のない形で出した『ペスタロッチ・フレーベル事典』などにみてとれる。

18：ペスタロッチ研究所の貢献

たしかに過去の記念年でも基礎資料の整理や刊行が企画推進された。その点でここ数年末、ペスタロッチ研究所とチューリッヒ大学、ことに前者のはたしている役割と貢献は、たんなる個人研究者の比でなく、きわめて大きい。その潤沢な資金で、ついに批判版の第17B巻と第29巻補遺版、書簡集でも等14巻という補巻を出し、文献目録と新しい研究雑誌その他の刊行も実現させた。そのなかには、フリートリヒがデュッセルドルフ大学在任期にDFG（ドイツ学術振興会）の資金でシュプリンガーとともに87年に着手、統一後の旧東独圏の大学再編のために移ったイェーナ大学で94年に完成したペスタロッチの著作全集28巻と書簡集6千通13巻の計1万2千頁のテキストのCD-ROM版の刊行がある。この電子テキストが新機軸であることはいうまでもないが、目下のところ上のふたりの編者の論文が語彙の使用頻度や人名インデックスを多用している特徴からこのテキストの利用が推測できる程度であり (Friedrich 1996; Springer), それによる大々的な論著はまだ見当らない。検索・確認作業ではその時間経済に資する面はあろうが、肝心なのは文献的な一次資料であり、正確な基礎情報であろう。ちなみにこのCD-ROMテキストを贈られて「日本」から検索してみたところ、そこでの唯一の日本関連項目だった「長田新」は「京都大学教授」とあった。その卒業生だが広島大学の教授である。250年記念事業のひとつ『ペスタロッチ全集索引版』もまたそのまちがいを引き継いでいる (Pestalozzi 1994; 宮崎 1996 c)。最近、ドイツの教育史学会の委員長になったハンノ・シュミットはいつも面白いことをいう。「CD-ROMなんてこわくない。」60年代のオールピの演劇「ヴァージニア・ウルフなんてこわくない」をみたのだろう。

ペスタロッチ研究は、その主題と方法論の両面で時代の典型的パラダイムや教育および教育学の動向とほぼ平行に展開してきた。その点では、今日、社会史や精神分析の示唆は大きいですが、スイス側の間口はシンポジウム組織委員会や、会議後の専門誌や高級紙の特集をみても、決して広く

していない。今回のシンポジウムのみならずその前後でも最も注目されているオスターヴァルダールは、ペスタロッチの教育記念祭がいうならば儀礼とセクト対立の図柄を示すことを検証した。しかし、一般状況としては、一方での今日の世紀末風潮、なにより教育理論を指導し、かつ実践のパスを喚起する基礎理論の少なさと、他方での構造主義や社会システム理論による主体の解体やその機能主義的還元、さらにポスト・モダンによる歴史の物語化からみた「近代のプロジェクト」への挫折宣言、これらが近代「啓蒙」の前夜ないしその高揚期にいるペスタロッチの歴史的、思想的な位置づけを複雑にしている。ただ、これらによって回答をもたぬ教育科学はあっても、回答をさがし求める教育がなくなることはないだろう。そこからまた新しいパラダイムの登場が期待されよう。

19：ペスタロッチ研究所とその対外戦略

3日間のシンポジウムが終った翌日の1月18日、午後6時から8時まで主催者と会場をペスタロッチアヌムにして小さなコロッキウム「アジア圏のペスタロッチ」があり、数年ぶりに訪ねた。実は、この研究所を文字通りペスタロッチ研究そのものの機関とみるのは正しくない。正式名称 Pestalozzianum Zürich が示すように一大教育・研修施設であり、非常勤職員と兼職者をいれれば95年段階では110名をこえる。「学校教育・成人教育」「人間・環境・社会」「メディア・コミュニケーション」および「文化」の4部門で30名、補習・研修の4つのセクターで49名、図書館は13名からなり、ペスタロッチ研究そのもののセクションには5名しかいない (Pestalozzianum)。このような大組織で社会教育、教員研修のための活動や、博物館はあっても、研究資料などの点では、正直、魅力をもっていなかった。ヴィンターツールの教員養成所のハインリッヒ・ロートなどが3冊本の選集や「暫定的索引」(1985)などをだしていたが、啓蒙と手仕事の域を出るものではなかった。60年近い校訂作業をして、1990年に90歳で亡くなったデュンクの80年代は、とくにその谷間にあった。このことは、82年にかれがマールブルク大学で名誉学位をうけにきたとき、フレーゼやクラフキ、ラムザウアーの末裔の女性教授らとともに直接聞いたことがあった。

いまや、この研究所も90年代以降の世界の変動を視野にいれてペスタロッチのいわば「世界化」をめざす活動を強化しているとみてさしつかえない。とくに94年以降、ペスタロッチのテキスト、研究論集や情報の提供での3種類の定期刊行物、さらにはCD-ROMテキストの発刊など、めざましい変貌をみせてきた。96年の今回のシンポジウムはその頂点ともいえた。これを機に研究所は専門研究の活性化もさることながら、教育文化の対外交流を期待しており、ペスタロッチの教育実践の意義をアジア諸国にむけて出版、翻訳、学会、留学、研究滞在、情報提供、さらに施設すら設置して広めるネットワークづくりをめざしている。このペスタロッチの進出は西欧やアジアの日本をこえて、東欧圏やアジア諸国にまでひろがり、バルト諸国でもその計画は96年の夏に実施された。このようないわば学術・文化・教育の「国際化」戦略は、それが伝播か受容かのいずれであれ、当該国の歴史、実態、将来展望を映し出し、ペスタロッチの宗主国スイスと諸外国とのいわば輸出入

関係はアジア圏ではその仲介・媒介国だった日本との関係をふくめ複雑化している。いまや、体制変動のあとペスタロッツ教育の輸入大国とみなされる新生中国、戦後なお続いていた日本まわりから自立せんとする新興韓国を新しくて強力なパートナーにしはじめた。

中国はドイツの国際学術政策でもロシアとともに最大の被援助国だが、実は、この研究所もすでに94年に使節団を派遣し、多様な企画を実行に移している。94年10月の5日間、北京で中国国立教育研究所と共催で国際シンポジウムを開催、スイス側は所長（当時）ゲーリヒ、チューリッヒ大学のシュタドラーとハーガー、早くからペスタロッツの3巻本選集（1977-79）を編みその中国訳がはじまったブリュールマイヤー（A. Brühlmeier）、それにかれらに近くCD-ROM版を仕上げたドイツ側研究者としてフリートリヒで構成された使節団が訪中した（Gehrig 1994；宮崎 1996 c）。

20：コロッキウム「アジア圏のペスタロッツ」一日・中・韓・台からの報告一

今回のコロッキウムも小さいとはいえペスタロッツアヌムの拡充戦略の延長上にあった。資格も会費もないオープンな会合で、終了後にはパーティが準備されていた。参加者は総勢約40人、主催者側の研究所員が中心だった。そこでは中国側4人（大陸3人、台湾1人）、韓国から3人、日本から3人がいたが、前日までのシンポジウムの発表者としては、トレーラー、夫人同伴のフリートリヒ、もうひとりにクーレマン（G. Kuhlemann）がいた。このかれはマールブルクのフレーゼのもとでペスタロッツで学位をとり、いまはシュツトガルト図書館情報大学の教授、CD-ROMテキストには最高の論評をしているひとである。

この会合での報告が目的で本国から招待された中国の大陸側からのふたりと韓国からのひとり、それにシンポジウムが主目的だった日本側も伊藤、2日まえに今回のシンポジウムの準備段階から運営の中心にいた前所長ゲーリヒにいわれて突然の参加をした筆者の5名が、それぞれが各20分の報告をした。司会者はもちろんゲーリヒである。

このコロッキウムでは、配布資料はなく、報告集の類もなかった。まず、かつてチューリッヒ大学で中国語を教えていたという女性研究者（陳洪捷）が比較教育的接近を重視する報告をした。そこにはかなりプラグマチックな視点があり、自国の教育政策の設定方向に照準を合わせて外国の教育の政策、理論、実践を選択的に導入しようとする姿勢があった。この席に、ドイツ学術交流会（DAAD）の奨学生としてドイツ語専攻の若い大学院生がいたのも印象に残った。

とりわけ、元来ゲルマニストで18世紀ドイツ古典文学を勉強したとっていた杜文棠は、現在は中国軍事歴史委員会副主席、中国国際文化アカデミー主任、中国社会科学院世界史研究所研究員という要職者である。かれは旺盛かつ自信にみちてその論調を展開したが、そこにはプラグマチズム

と「大國中華」意識との双方向性が明瞭だった。西洋受容の「百年の遅れ」をいう一方で、自らの諸子百家の伝統を誇り、西欧ヒューマニズムよりも儒教思想で13億の人民にたいする百万人のエリートによる指導体制をめざすという。外国受容の段階に差があるとはいえ、この発言にはドイツやスイスの参加者は驚きの表情すらみせていた。中国側にとって西方から受容すべきは技術的、経済的な効果であって、ペスタロッチ受容の照準もいうならば市場的社会主義のために基礎陶冶、とくに教育方法と職業・労働教育に合される。この主張には先のペキン・シンポジウムの報告集での中国側の内容との重なりがみえたが、ヨーロッパ側の発表のアカデミズムや研究の現段階とは余りに大きい隔たりがあった (Gehrig 1994)。

なお、台湾からハイデルベルク大学に留学中という若手研究者が司会に求められて応じた発言は、上の大陸側の主賓と大きく相違していた。ペスタロッチに関しては長田新の監修の翻訳のテキストを使用したり、あるいはアメリカでの研究による学位論文がすでに2点あるとのこと。しかし、いまはスイス、ドイツからの直接の受容研究と現地研究に移行していると述べた。ただ、ペスタロッチの研究や受容の今後については希望と困難とをあわせて告白していた。

韓国側からレポートしたソウル教育大学の名誉教授金丁煥は、かれが広島大学で大学院を卒え、そこで学位を得ていることと関連して、その当時のドイツの精神科学的教育学の線上を語っていた。しかし、この国でも従来の日本経由でなく、スイス本国と関係を強化してペスタロッチの教育とその研究をめざすことを強調しその支援を要望した。かれは、自身の専攻や関心領域、さらにこの国の教育の重点のありかを反映させ、ペスタロッチ受容の意義を社会教育としての家庭教育や女子教育でとらえている。これには、日本の過去と現状に思いをいたさざるをえなかった。

ちなみに、上の94年の北京シンポジウムでは、国際教育史学会の委員長のデパーペが論文提出で現地参加にかえている。そのなかで、かれは、過去の教育家やその遺産の研究には歴史と実用と理論との3つのレベルとその軽重でパラダイム・シフトが敷かれる、と論じた。このことで20世紀のペスタロッチ研究の類型化を試みた小著の主張に言及しながら、きたるべき国際的研究のシフトとして比較史的パラダイムをあげ、それを実証的にも確認しながら中国の立場を意識し肯定する論調を張っている (Depaepe 1994 51f; ders 1996 450; Miyazaki 1996 b)。

21：日本のペスタロッチ受容と研究

日本の場合、ペスタロッチの名は江戸末期にオランダまわりで入った。しかし、知られるように実質的な導入は、明治20年代のアメリカ経由であり、師範教育政策をバックに定着した。スイスとの提携に入ったのは、昭和初期のペスタロッチ没後100年記念頃からである。それ以後は、単純化していえば、テキストの邦訳や啓蒙ではスイスに、研究・解釈の推進ではその範型をドイツの動向

に求めてきた。新カント派のナトルプの社会的教育学ないし理想主義、ディルタイ、シュプランガーの精神科学的教育学およびその発展型のもとに接近し、ドイツで1960年代まで有力だったその傘下に今なお連なる面も持っている (宮崎 1996 b)。

日本は、ドイツを除けば、世界最大のペスタロッチ受容国である。「ペスタロッチーの夕べ」や「ペスタロッチ祭」が、古くは1910年頃から地方や伝統的な教育学系大学、さらには国立教育研究所にまであり、なかには今日も存続している。モルフの伝記の邦訳者とされ、かつ13巻全集の編集校閲者長田新がペスタロッチの墓のもとに眠り、その碑に「スイス民主主義の紹介者」とまで刻まれていることは受容の大きさとその関係を語っている。また、1955年に設けられ66年まで続いた「ペスタロッチー賞」、1992年に創設された「ペスタロッチー教育賞」は教育実践家を顕彰し、「村おこし」で岡山県下に誕生した「ペスタロッチー村」には生誕記念年で世界のペスタロッチ村を撮影するためにチューリッヒの研究所はスタッフを派遣してきた。これらにみえるのは、顕彰、自己啓発、研究の三つの一体化であり、換言すれば、賛美や自己省察のない研究はないとする立場、あるいは批判の排除にならないともかぎらない構造である。

今回のチューリッヒの記念祭に日本の学会から祝賀メッセージが送られていたが、それが披露されたのはシンポジウムでなく、この「アジア圏のペスタロッチ」のコロキウムの上での回覧だった。この研究所が中心にテキストを編集刊行する貢献は大きいだが、その一方でベルン大学の研究プロジェクトや現代ドイツの研究活動とは異なり、ペスタロッチを普及させる推進機関の役割ももつ。これも現実的に「研究」方向を規定し、パラダイム形成に影響するが、オスターヴァルダーのことは使えば「教育学カルト」にならぬという保障はないだろう。教育学と教育科学の宿命のごときものがそこにはある。

日本のペスタロッチ研究史は、その蓄積において同じ立場のドイツに次ぐ位置にあり、受容の点ではむしろまさるだろう。ペスタロッチの著作やその研究書の翻訳や紹介の多さはいまなお他の追従を許さず、近年の日本ペスタロッチー・フレーベル学会の設立 (1982) やその編集になる『ペスタロッチー・フレーベル事典』 (1996) の刊行は研究者層の厚さを物語っている。たしかに、日本のペスタロッチ研究は、ドイツ語で発表される論著の出現により外部からの評価も受けはじめた (Friedrich 1994; Depaepe 1994)。分析なき讃美や研究へのイデオロギー支配や国家・大学単位の閉鎖性には幕ひきのときがきている。初期段階の導入ないし受容から対外紹介や比較検討への移行、受信から発信へ向かう研究形態の移行が自他両方でもとめられているのが現段階である。外国研究には外国受容から自国紹介へ、さらに進んで外国ないし本場との共同研究の三つのステップがある。この第三の研究課題によって内外の共同論議への道がひらかれるだろうし、そこには競争すら付随するであろう。

参照・引用文献リスト

- Bernfeld, S. 1976 : Sisyphos oder die Grenzen der Erziehung (1925)
- Bittner, G. (hg.) 1996: Autobiographische Texte—pädagogische und psychoanalytische Interpretationsperspektiven—, in : ders (hg.), Biographie im Umbruch, 13 – 26.
- Bittner, G. 1997 "Du, Kot der Welt, in welches ich mich vertieft..." — Pestalozzi als autobiographischer Denker—in: Zeitschrift für Pädagogik 43, 3, S. 357 – 373.
- Brühlmeier, A. (hg.) 1977ff : J. H. Pestalozzi—Auswahl aus seinen Schriften—, 3 Bde.
- Depaepe, M. / van Chorbrugge, H. 1994: Using or Abusing the educational Past? — some methodological Reflections on the Place of Johann Heinrich Pestalozzi in the Educational Historiography —, in : H. Gehrig (ed.), 1994, —, p. 51 – 62.
- Depaepe, M. / Simon, F. 1996 : Lever or Mirror in the History of Education? , in : Paedagogica Historica, 32, 2 , p. 421 – 450.
- Dräger, H. 1996 : Pestalozzi —Der vergessenen Erwachsenenbilder und seine andragogische Wirkungsgeschichte—, in : Hager, F.-P./ D / Tröhler (hg.), 1996 a, S. 121 – 135.
- Flitner, A. 1996 : Legendäre Pädagoge, in : Die Zeit. (12. Jan.)
- Friedrich, L. 1994 : Research of the Pedagogics of J. H. Pestalozzi —History, Status and Perspectives—, in : H. Gehrig (ed.), 1994, p. 84 – 99.
- Friedrich, L. 1996 : Zur Erforschung der Pädagogik J. H. Pestalozzis — Geschichte – Stand – Perspektiven—, in : Pädagogische Rundschau 1 , S. 35 – 58.
- Furrer, M. 1996 : Editorial zu Denk-mal Pestalozzi, in : M. Furrer u. a. (hg.), Denk-mal Pestalozzi, in : Bildungsforschung und Bildungspraxis, Schweizerische Zeitschrift für Erziehungswissenschaft, Beiheft 1 , S. 5 – 10.
- Gehrig, H. (ed.) 1994 : Pestalozzi in China — International Academic Symposium 10 – 14 Oct. 1994 in Beijing, on the occasion of the publication of J. H. Pestalozzi's Selected Works in Chinese — (Documentation).
- Gehrig, H. (ed.) 1996: Pestalozzi Gedenkjahr 1996 – Programm – .
- Gehrig, H. 1997 : Pestalozzi Gedenkjahr 1996 – Versuch einer Bilanz – , in : Neue Pestalozzi Blätter 1 , S. 13 – 16.
- Grunder, H. -U.1997: Neue Pestalozzi Studien 4 , 1996, hg. v. F.-P. Hager / D. Tröhler, in : Zeitschrift für Pädagogik 2 , S. 345 – 349.
- Gruntz-Stoll, J. (hg.) 1987 : Pestalozzis Erbe —Verteidigung gegen seine Verehrer— .

- Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.) 1996 a : Neue Pestalozzi Studien 4 — Dokumentationsband zum Pestalozzi-Symposium —.
- Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.), 1996 a : Vorwort zur Neue Pestalozzi Studien 4 — Dokumentationsband zum Pestalozzi-Symposium —, S. 9 – 10.
- Hager, F.-P. 1996 b : Zur Problematik der "Entmythologisierung." Pestalozzis, in : Neue Pestalozzi Blätter 2 , 2 , S. 15 – 18
- Herrmann, U. 1996 : Pestalozzis Denken im Kontext politisch-sozialer Modernisierungsprozesse, in : F.-P. Hager / D. Tröhler (hg.), 1996 a, S. 37 – 68.
- Herrmann, U. 1997: Historische Forschung als kulturgeschichtlichen Bewusstseins, in : Neue Pestalozzi Blätter 1 , 1 , S. 17 – 25.
- Historische Kommission der Deutsche Gesellschaft für Erziehungswissenschaft (hg.) / H. Schmitt (Red.), 1994 : Rundbrief 3 . Jg. S. 17.
- Hoof, D. 1987 : Pestalozzi und die Sexualität seines Zeitalters.
- Hoof, D. 1996 : Pestalozzis Entwurf sexualpädagogischer Sozialarbeit und Familienhilfe — Historische Wirkungsgeschichte—, in : Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.), 1996 a, S. 107 – 121.
- Ito, T. 1995: Die Rezeptionsgeschichte der "Pestalozzischen Methode" im Japan des 19. Jahrhunderts, in : Oelkers, J. / Osterwalder, F. (hg.) 1995.
- Koller, H. - Ch. 1980 : Die Liebe zum Kind und des Begehren des Erziehers—Erziehungskonzeption und Schreibweise pädagogischer Texte von Pestalozzi und Jean Paul—.
- Koller, H. -Ch. 1993 : Bildung im Widerspruch, in : Marotzki, W. / Süßner, H. (hg.), Kritische Erziehungswissenschaft – Moderne und Postmoderne – , S. 80 – 104.
- Kraft, V. 1996 a : Biographie und Pädagogische Theorie—Psychoanalytische Einblicke in Herz, Hand und Kopf Pestalozzis—, in : Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.), 1996 a, S. 277 – 293.
- Kraft, V. 1996 b : Pestalozzi oder das pädagogische Selbst — Eine Studie zur psychoanalytischen Denkens—.
- Kraft, V. 1996 c : Biographie und pädagogische Theorie — psychoanalytische Einblicke — , in : Leben und Denken Pestalozzis – , in : Jahrbuch für Historische Bildungsforschung, Bd. 3 , S. 25 – 49.
- Kraft, V. 1997 : "Invisible Loyalties" ? – einige Anmerkungen zu seinem Brief an Andreas Pestalozzi an August Hermann Francke – , in : Neue Pestalozzi Blätter 3 , 1 , 1997, S. 37 – 38.
- Krüger, H. – H. 1997 : Arbeitsgemeinschaft Erziehungswissenschaftliche Biographieforschung, in : Deutsche Gesellschaft für Erziehungswissenschaft, H. 15, S. 98 – 100.

- Kuhlemann, G. 1996 : Zwei Datenbanken auf CD-ROM, in : Pädagogische Rundschau 50, 1, S. 159-182.
- Liedtke, M. 1994 : Neue Pestalozzi Studien 1, 1993 (Besprechung), in: Zeitschrift für Pädagogik, 3, S. 482-486.
- 宮崎 俊明 1981 : ペスタロッチ研究の変遷と新動向—主題と方法論をめぐる6形態—, 教育学研究 48, 2, 48-56頁.
- 宮崎 俊明 1986 : 教育の理論—1970年代以降の西ドイツの場合—, 教育学研究 53, 3, 43-53頁.
- 宮崎 俊明 1987 : 西ドイツの教育学動向の断面—学会, 研究者・学校訪問, 教育学教育からみた—, 教育学研究 54, 4, 54-56頁.
- Miyazaki, T. 1992 : Pestalozzi und seine Lektüre - Entfaltung des Bewußtseins über Bildung, Schule und Gesellschaft - .
- Miyazaki, T. 1996 a : Das ethnologische Probleminteresse in seinen "Bemerkungen zu gelesenen Büchen (1785-97)", in : Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.), 1996 a, S. 265-275.
- 宮崎 俊明 1996 b : "ペスタロッチ—研究史 (日本)", 日本ペスタロッチ—・フレーベル学会 (編) 『ペスタロッチ—・フレーベル事典』 1996, 327-328頁.
- 宮崎 俊明 1996 c : ドイツの教育研究の現況—1994年研究者訪問と学会参加からみた—, 鹿児島大学教育学部研究紀要 48, 103-168頁.
- 日本ペスタロッチ—・フレーベル学会 (編) 1996 『ペスタロッチ—・フレーベル事典』
- Oelkers, J. 1987 : Wie kann der Mensch erzogen werden? in : Gruntz-Stoll, J. (hg.), S. 27-40.
- Oelkers, J. 1995 : Das Jahrhundert Pestalozzis?, in : J. Oelkers / F. Osterwalder (hg.) : Pestalozzi — Umfeld und Rezeption—Studien zur Historisierung einer Legende—, S. 25-51.
- Oelkers, J./ F. Osterwalder (hg.) 1995 : Pestalozzi — Umfeld und Rezeption, Studien zur Historisierung einer Legende—.
- Oelkers, J. 1996 : Zum Geleit für F. Osterwalder, Pestalozzi — ein pädagogische Kult —, in : Osterwalder, 1996 b, S. 5-6.
- Oelkers, J. 1996 : Herz, Hand und keine Kopf, in : Frankfurter Allgemeine Zeitung (13. Jan.)
- Osterwalder, F. 1989 : Die pädagogischen Vorstellungen in der Helvetischen Gesellschaft und die Französische Revolution, in : Zeitschrift für Pädagogik, Beiheft 24, S. 255-272.
- Osterwalder, F. 1995 a : Vorwort zu "Pestalozzi — Umfeld und Rezeption — Studien zur Historisierung einer Legende —", in : J. Oelkers / F. Osterwalder, (hg.), 1995, S. 7-8.

- Osterwalder, F. 1995 b: Zu einem Problem der Pestalozzi – Forschung, in : J. Oelkers / F. Osterwalder (hg.) 1995, S. 11 – 21.
- Osterwalder, F. 1995 c: Zur Vorgeschichte der pädagogischen Konzepte, in : J. Oelkers / F. Osterwalder (hg.) 1995, S. 52 – 91.
- Osterwalder, F. 1995 d: » Kopf Herz Hand « —Slogan oder Argument ?—, in : J. Oelkers / F. Osterwalder (hg.) 1995, S. 338 – 371.
- Osterwalder, F. 1995 e: Die pädagogische Konzepte des Jansenismus im ausgehenden 17. Jahrhundert und ihre Begründung – Theologische Ursprünge des modernen pädagogischen Paradigms—, in : Historische Kommission der DGfE (hg.), Jahrbuch für Historische Bildungsforschung 2, S. 59 – 84.
- Osterwalder, F. 1995 f: Die Methode — Ordnung, Wahrnehmung und moralische Subjektivität—, in : J. Oelkers / F. Osterwalder (hg.) 1995, S. 165 – 204.
- Osterwalder, F. 1996 a: Der Pestalozzianismus in der Herausbildung der Laizität von Schule und Pädagogik—, in : F.-P. Hager / D. Tröhler (hg.), 1996 a S. 361 – 379.
- Osterwalder, F. 1996 b: Pestalozzi —ein pädagogische Kult—.
- Osterwalder, F. 1996 c: Das Pädagogische als Kult des Pädagogen, in : Neue Pestalozzi Blätter 2, 2, S. 19 – 22.
- Osterwalder, F. 1996 d: Pestalozzis Einheit —ein theologisches Problem im Zentrum der Pädagogik—, in : Pädagogische Rundschau 50, 1, S. 117 – 132.
- Osterwalder, F. 1996 e: Zum 250. Geburtstag Pestalozzis – rationale Argumentation oder Kult des Pädagogischen – , in : Zeitschrift für Pädagogik 45, 2, 149 – 163.
- Osterwalder, F. 1996 f: Pestalozzi, Pestalozzianismus und der Aufbau des schweizerischen Schulsystems, in : M. Furrer u. a. (hg.), S. 11 – 33.
- Pädagogische Rundschau 1996 / 1 —Zur Wiederkehr des 250. Geburtstags von J. H. Pestalozzi — Beiträge zur Rezeptions- und Forschungsgeschichte—.
- Pestalozzi, J. H., 1927 ff: Sämtliche Werke, 28 Bde.
- Pestalozzi, J. H., 1946 ff: Sämtliche Briefe, 14 Bde.
- Pestalozzi, J. H. 1994: Sämtliche Werke und Briefe auf CD-ROM.
- Pestalozzianum 1994: Infor & Akzente, S. 43f.
- Roth, H. (zugst.) 1985: J. P. Pestalozzi—Kritische Ausgabe —Provisorischer Registerband.—
- Schmitt, H. u. a. 1996: Visionäre Lebensklugheit —J. H. Campe in seiner Zeit—.

- Soëtard, M. 1993 : Toshiaki Miyazaki, Pestalozzi und seine Lektüre, in : *Paedagogica Historica* 1 , S. 324 - 326.
- Springer, S. 1995 : Vater, Lehrer, Führer —Pestalozzis Selbstdarstellung im Spiegel seiner Institutsreden in Yverdon — , in : Furrer, M. 1996, 56 - 100.
- Stadler, P. 1988 / 93 : Pestalozzi - Geschichtliche Biographie, I, II—.
- Stadler, P. 1996 : Das Zeugnis der Briefe, in : *Neue Züricher Zeitung* (12. Jan.)
- Stübig, H.1996 : Pestalozzis Einfluss auf die preussische Reformpädagogik, in : Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.), 1996 a, S. 87 - 97.
- Tenorth, H.-E. / G. Böhme 1990 : Einführungen in die Historische Pädagogik.
- Tenorth, H.-E. 1994 : Profession und Disziplin - Zur Formierung der Erziehungswissenschaft — , in : H. -H. Krüger / Th. Rauschenbach (hg.), *Erziehungswissenschaft - Die Disziplin am Beginn einer neuen Epoche* —, S. 17 - 28.
- Tenorth, H.-E.1996 : Pestalozzis Rolle in der Preussischen Lehrerbewegung, in : Hager, F.-P. / D. Tröhler, 1996 a, S. 423 - 447.
- Tröhler, D. 1993 : T. Miyazaki, Pestalozzi und seine Lektüre 1992 (Besprechung), in : *Zeitschrift für Pädagogik*. 1993 / 6 , S. 1030 - 1033.
- Tröhler D. 1995 : Vorschau auf das Pestalozzi-Symposium 1996, in : *Neue Pestalozzi Blätter* / 1 , S. 4 .
- Tröhler, D. 1996 a : Der Paradigmenwechsel in Pestalozzis Sozialphilosophie im Umfeld der Französischen Revolution, in : Hager, F.-P. / D. Tröhler (hg.), 1996 a, S. 205 - 230.
- Tröhler, D. 1996 b : Hauptströmungen und Tendenzen der Schweizerischer Pestalozzi-Forschung, in : *Pädagogische Rundschau* 50, 1996 1 S. 59 - 74. ただし、これは次々と同じ内容。トレーラー 1996:ペスタロッチ-研究史 (スイス) (福田訳), 『ペスタロッチ-フレール事典』1996, 324 - 327頁。
- Tröhler, D. 1997 : Der Grossvater als pietistisch-pädagogischer Vermittler ? , in : *Neue Pestalozzi Blätter* 3 , 1 , S.28 - 32.
- Wullschleger, O. 1985: Alles für andere, alles für sich —Studien zur Person J. H. Pestalozzis—.

欧 文 目 次

Toshiaki MIYAZAKI

Trends der Pestalozziforschung
 — ein Tagungsbericht über das internationale Symposium
 anlässlich des 250. Geburtstages Pestalozzis, Januar 1996, Zürich —

INHALT :

- 1 : Zürich
- 2 : Plan zum Pestalozzi – Gedenkjahr
- 3 : Zwei vergangene Symposien (1987, 1994) und Berner Forschungsgruppe
- 4 : Meine Arbeit „Pestalozzi und seine Lektüre — Entfaltung des Bewußtseins über Bildung, Schule und Gesellschaft—“ (1992)
- 5 : Jubiläumsveranstaltung für das Gedenkjahr
- 6 : Eröffnung des wissenschaftlichen Symposiums
- 7 : Programm des wissenschaftlichen Symposiums
- 8 : Pestalozzis Konflikt mit dem modernen Bewußtsein (U. Herrmann)
- 9 : Entmythologisierung des Pestalozzibildes —Dekonstruktion der Historie – (F. Osterwalder)—
- 10 : Institutionalisierung der biographischen Beschreibung und „Wiederthologisierung“ der Pädagogik
- 11 : Dekonstruktivierte Erzieher —Pestalozzi als Gegenstand des Psychoanalyse – (V. Kraft)—
- 12 : Pestalozzis Säuglings – und Kinderzeit
- 13 : Moratorium und Narzißmus in seinen Werken und Erziehungspraxis
- 14 : Psychoanalytische Pädagogik und ihr latenten Texte
- 15 : Andere psychoanalytische Sichtpunkte (H. Ch. Koller und G. Bittner)
- 16 : Problemstellung der Rezeptions – und Wirkungsgeschichte von deutscher Seite (H. -E. Tenorth)
- 17 : Position der Berner Forschungsgruppe und „Map für Pestalozziforschungen“
- 18 : Kolloquium „Pestalozzi in Asia“ —Berichte aus Japan, China, Korea und Formosa—
- 19 : Pestalozzi – Rezeption und Forschungsentwicklung in Japan

Literatur

- in : Bulletin of the Faculty of Education, Kagoshima University, Studies in Education, vol. 49, 1997,
 S. 159-185.